

2/24 mon. フェスティバルホール

## 女王蜂

完全復活を印象付けたツアー  
今のすべてを凝縮した80分に見た深化



女王蜂の全国8カ所を廻る【全国ホールツアー2025『狂詩曲～ギャル爆誕～』】大阪公演が2月24日、フェスティバルホールで開催された。昨年6月、アヴちゃん(vo)の体調不良による休養が発表されて以来の活動再開とあってか、会場には開演前から高揚感にも似た一種独特な空気が漂っていた。

定刻を少し過ぎ、アクアグリーンを基調とした衣装に身を包んだ、やしちゃん(B)、ひばりくん(G)、サポートメンバーのながしまみのり(Key)、山口美代子(Dr)が登場。ギターの炸裂音と重いドラムのビートが響き、最後にロングドレス姿のアヴちゃんが現れると、一段と大きな歓声が。そのオープニングを飾ったのは『奇麗』(2015年発表)からの一曲『もう一度欲しがって』だ。久々のステージと観客たちを愛でるようにたおやかな歌声を届けた後は、スカートの裾を剥ぎ取りミニ丈に変わった衣装で攻撃的に点滅する光の中、バンド最大のヒット曲『メフィスト』を披露。早くもオーディエンスを歓喜の渦に巻き込むと、「ど

うもありがとう」という言葉と共に演奏された『MYSTERIOUS』では、流麗で典雅なリズムがフロアを妖しく染めていく。さらに扇情的なベースが跳ねる『バイオレンス』、終末感を漂わせる『ハイになんてなりたくない』、印象的なフレーズが中毒性を持つ『BL』と、アバンギャルドでポップ、雅で斬新といった女王蜂でしかないシアトリカルな音世界を次々と描き、それに呼応する観客たち



のジュリ扇が縦横無尽に揺れる様と相まって壮観な光景が広がった。

そんないくつもあったハイライトのひとつが10曲目の『火炎』。舞台前方に降ろされた紗幕に赤やオレンジの照明とメンバーたちの影が浮かび上がり、実像と交錯する幻想的なステージングに息を呑む。派手さはないものの、繊細さと隠しきれない気品は静かな衝撃をまとい、女王蜂の深化を感じさせた。続く『つづら折り』はパワフルなバンド・アンサンブルで届けられ、曲終盤、ステージを離れていたアヴ

ちゃんがチュチュのようなオレンジ色の衣装に着替え、再合流。静かに泣ける『空中戦』を経て、ひとり残ったアヴちゃんが椅子に座わって歌い始めたのは『杜若』だ。演劇の面白如く切々と聴かせた前半から後半には黒の衣装に替わったメンバーが戻り、力強いブレイドで圧倒。そして、家族の脆さや痛みを内包した『Q』から『十』、ドラマチックな『聖戦』へ、内省的で荘厳な楽曲が連投されると会場には拍手も歓声もなくすように、究極の静寂が流れた。

「行くよー」を合言葉に歌謡ロックな『HALF』が投下され、再び展開された煌びやかなパーティに熱気も急上昇していく。アゲアゲのダンス・チューン『金星』からラストはツアータイトルに掲げ、人の痛みに寄り添いながらも自己肯定を促す『狂詩曲』でその想いとひとつの結実を見せ、ライヴが終了。去り際、両手を広げみんなを抱きしめる仕草をしたアヴちゃんにこの日最後の歓声が響いた。

MCやチューニングのための曲間も、アンコールもない。約80分に今のすべてを詰め込んだステージは、美しく潔く感動的であった。3月5日にはニューアルバム『悪』が発売され、そのツアーも決定している中で行われた本ツアー。重要な区切りに、女王蜂の次なるステップを踏み出したのかもしれない。☺



### 女王蜂 全国ホールツアー 2025 「悪」

5月15日(木) オリックス劇場  
6月27日(金) ロームシアター京都 メインホール  
7月11日(金) 広島上野学園ホール  
7月12日(土) 岡山芸術創造劇場ハレノワ 大劇場